三重県埋蔵文化財調査報告　198

笹遺跡(第3次)発掘調査報告

―― 一志郡一志町井生 ――

1999・11

三重県埋蔵文化財センター

序

現在我々が日々生活している場所の地下には昔の人々の生活の痕跡である遺構や使用した道具である遺物が眠っていることがあります。これら遺構・遺物を含めた埋蔵文化財を保護し、後世に残していくことが当埋蔵文化財センターの役割であります。しかし、我々の生活が便利で豊かなものになっていく過程において、これらの埋蔵文化財を現状のまま保存していくことが困難になってくる場合、生活の至便さと引き換えにやむをえず記録保存という形でもって後世に伝えていこうというのが緊急発掘調査ということになります。この発掘調査やその結果得られた成果、それが世間の脚光を浴びるような重大なものであればあるほど、そちらに目が向いてしまいがちです。しかし、我々が本当に目指さなければならないのは先ほども述べたように遺跡自体の保護であり、そのことを忘れてはならないでしょう。

今回ここにご報告いたしますのは主要地方道久居美杉線井生ＢＰ緊急地方道路整備（Ｂ改良）事業で影響を受ける笹遺跡（第３次）の発掘調査成果であります。笹遺跡としては平成４年度に一志町教育委員会、平成９年度には当センターによって調査が行われており、弥生・奈良・鎌倉・室町時代の遺構・遺物が確認されています。３回目となる今回の調査では遺構・遺物ともに非常に少なく、知的好奇心を喚起するといったような成果はあまり得られなかったとはいえますが、郷土の歴史を解明していくうえでの貴重な財産の一つになったのではないかと考えています。

調査にあたっては、県土整備部道路整備課、久居建設部、一志町教育委員会には多大なご理解とご協力を賜りました。また、作業にあたって頂いた地元の方々には水が常時湧いてくる困難な状況の中での調査であったにも関わらず、大変熱心に仕事をして下さったこと、文末ながら深く感謝の意を表明致します。

平成11年11月

三重県埋蔵文化財センター

所長　大井　與生

例　　言

1．本書は、三重県一志郡一志町井生に所在する、笹（ささ）遺跡（第3次）の発掘調査報告書である。

2．調査は、主要地方道久居美杉線井生ＢＰ緊急地方道路整備（Ｂ改良）事業に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3．調査は次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

技師　　金子　智子

主事　　筒井　英俊

4．調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課、久居建設部、一志町教育委員会及び地元の方々からの多大な御協力を頂いた。

5．発掘調査後の出土遺物の整理及び当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行い、以下の方々の補佐を得た。執筆及び全体の編集、出土遺物の写真撮影は、金子智子が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、奥田康子、小倉靖子、柿原清子、角谷和代、菊地淳子、楠　純子、小林佳代子、須賀幸枝、鈴木美智子、田中里佳、田渕美和、中川章世、中山豊子、西田衣里、長谷いづみ、浜口由美子、浜崎佳代、早川陽子、堀さや子、松本春美、村田優子、森島公子、山上由香（50音順、敬称略）

6．挿図の方位は全て、国土座標第Ⅵ系を基準とした座標北で示している。なお、真北はN0°13′0″W、磁北は座標北のN6°30′0″Wである。

7．本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝

8．出土遺物や資料は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前　　言……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．層位と遺構……7
Ⅳ．遺　　物……7
Ⅴ．結　　語……8

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……3
第２図　遺跡地形図……4
第３図　調査区位置図……4
第４図　調査区平面図……5～6
第５図　調査区（Ｂ区）西壁土層断面図……5～6
第６図　出土遺物実測図……7

表　目　次

第１表　出土遺物観察表……8

図　版　目　次

図版１　Ａ区　調査区全景　北から……9
　　Ｂ区　調査区全景　北から……9
図版２　作業風景……10
　　出土遺物写真……10

Ⅰ　前　　言

(1)　調査の契機

三重県教育委員会及び三重県埋蔵文化財センターでは、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内にある文化財の確認とその保護に努めている。こうした中で、平成10年度に当センターでは三重県県土整備部道路整備課から、主要地方道久居美杉線井生ＢＰ緊急地方道路整備（Ｂ改良）にかかる事業計画の回答を受けた。事業予定地内の北側には周知の遺跡として笹遺跡が存在することが判明しており、笹遺跡としては平成４年度には一志町教育委員会、平成９年度には県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている。そこで今回の事業予定地内での遺跡の広がりを確認するために平成11年１月11日に県埋蔵文化財センターが試掘調査を行った。その結果からは遺構・遺物ともに確認されなかったが、平成４年度に一志町教育委員会が行った調査区に隣接する部分については遺跡が広がっていることが確実であると判断された。

この取り扱いについては、その保護に努めるよう県県土整備部や、久居建設部、県埋蔵文化財センターおよび県生涯学習課の間で協議を重ねたが、現状保存が困難なため、やむなく事前に発掘調査を行うこととなった。

(2)　調査の経過

発掘調査は平成11年５月10日から７月８日まで実施した。調査区は平成４年度の一志町教育委員会によって調査された農道を挟んで西をＡ区、東をＢ区とし、各200㎡ずつ計400㎡を設定した。また、最終的な調査面積は、調査によって両方の調査区の東西を横断する溝が検出されたため、その延長を確認する目的で拡張した部分約100㎡を含めた500㎡であった。なお、小地区の設定にあたっては、４ｍ×４ｍを基準として北から南へ数字、西から東にアルファベットの番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

調査日誌（抄）

月　日	
５．26	発掘資材搬入。調査区表土の重機による除去開始。
５．28	表土除去終了。小地区設定。
６．１	排水溝掘削。
６．２	Ａ区ｂ7～9、Ｂ区ｇ・ｈ7～9遺構検出。
６．３	Ｂ区 遺構検出。
６．７	基準点測量。
６．８	Ｂ区ｇ７以北遺構検出。ｇ３～７遺構掘削。
６．９	Ｂ区検出終了。ＳＤ１および他の遺構掘削開始。
６．10	Ｂ区ＳＤ１掘削。土層断面写真撮影。Ａ区ｂ・ｃ３～６検出。
６．11	Ａ区検出および撹乱掘削。Ｂ区ＳＤ１掘削。
６．14	Ａ区ＳＤ１掘削および撹乱掘削終了後清掃、写真撮影。 Ｂ区撹乱掘削終了後清掃、写真撮影。
６．16	Ａ・Ｂ区平板実測。
６．17	Ａ・Ｂ区レベル計測。Ｂ区西壁土層断面実測。
６．21	ＳＤ１延長確認調査。Ａ・Ｂ区東西に７ヶ所のトレンチ設定、重機により掘削。
６．22	ＳＤ１延長部分の清掃、雨により作業中止。
６．23	ＳＤ１延長部分の清掃、写真撮影。
６．24	ＳＤ１下端ライン実測。レベル計測。
６．28	ＳＤ１延長部分平板実測。レベル計測。 Ａ・Ｂ区の水抜き。
７．１	実測基準点の座標計測。
７．２	道具撤収。

Ⅱ　位置と環境

笹遺跡(1)は三重県一志郡一志町井生に位置し、雲出川右岸段丘上に広がる遺跡で、今回の調査区は南に約0.5～0.6mを雲出川が東流している。現況は水田および畑地である。以下、周辺の歴史的環境について、時代を追ってみていきたい。

一志町内では、縄文時代の遺跡・遺物は数少なく弥生時代の遺跡として知られる高畑遺跡(2)から中期末葉～後期・晩期の鉢の破片などが出土している。[1]

弥生時代になると、井生地区内では前述した高畑遺跡、笠月遺跡(3)などがでてくる。高畑遺跡からは前期新と考えられる甕や中期の壷など、笠月遺跡からは中後期の土器片等が出土している。[2] また、平成４年度に一志町教育委員会が調査した笹遺跡からは中期の竪穴住居や壷・甕等の弥生土器が確認されている。[3] さらに、平成９年度に県埋蔵文化財センターが調査した笹遺跡からも中期の土坑などが検出されており、弥生土器壷が完形で出土している。[4] また、小山地区では県埋蔵文化財センター[5]と一志町教育委員会[6]によって鳥居本遺跡(4)が調査されており、県の調査では、竪穴住居、方形周溝墓、土坑が、また、一志町の調査では、方形周溝墓、土坑、溝等が検出されている。そして白山町に目を向けると、和遅野遺跡(5)、亀ヶ広遺跡(6)などからも弥生前～後期の土器が採集されている。[7]

古墳時代には群集墳の造営が盛んである。井生地区では、11基の古墳が確認されている上井生古墳群(7)がある。[8] 内部主体はそのほとんどが横穴式石室で須恵器等の遺物から７世紀前半頃の造営と考えられている。また、前述の高畑遺跡には、墳丘、墳形は明らかでないが、横穴式石室の石材と考えられる巨石が段丘縁辺部に立っており古墳の存在が想像される。[9] 井関地区では、ユガミ谷古墳群(8)の存在が知られる。[10] ２基の円墳とマウンドを持たない小石室の３基から形成される。須恵器、土師器のほか耳環、玉類など副葬品も多く出土しており、６世紀後半から形成されはじめたと考えられている。同じく井関地区では下名倉古墳群(9)の存在も挙げられる。[11] 墳丘が残っているものはないが、３～５号墳は発掘調査が行われており、土師器・須恵器・玉類等の出土遺物から７世紀前半頃の造営が考えられている。

飛鳥・奈良時代になると、集落跡としては前述の鳥居本遺跡からは、県の調査では、井戸、竪穴住居、掘立柱建物、土坑、周溝遺構などが、一志町の調査では、竪穴住居や溝が確認されている。[12] また、高畑遺跡・笠月遺跡からも土師器などの出土が見られる。[13] また、平成４年度の笹遺跡の調査では奈良時代の大溝が検出されている。[14]

次に中世になると、数々の遺跡から山茶椀等の中世を代表する遺物の出土がみられるようになるが、雲出川本流に近い井生・大仰・高野地区では特に瓦器の比率が他地域に比べて高く、畿内の影響が強かったことが指摘されている。[15] 平成９年度の笹遺跡の調査では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物・溝・土坑が確認されており、山茶椀、土師器などが出土している。[16] 平成４年度の笹遺跡の調査でも遺構は確認されていないが、山茶椀などの出土があった。[17] 今回も含め発掘調査では瓦器は確認されていないが、遺跡内にその散布は認められるようである。[18] 高畑遺跡・笠月遺跡・宮ノ東遺跡からも土師器鍋片・山茶椀などが出土している。[19]

そして、伊勢において中世の歴史を物語る際に抜きにして考えられないのが北畠氏の存在である。一志郡は北畠氏にとって経済的にも軍事的にも重要な役割を担っていた地域であった。その様な当時の様相を偲ばせるものとして、一志の平坦部と多気を結ぶ交通の要衝に位置する波瀬城(10)をはじめ、周辺には波瀬館(11)や出丸城(12)などの中世城館址が存在している。[20]

この様に北畠氏の活躍した時代も織田信長・豊臣秀吉による天下統一の事業の中で終わりを告げ、時代は近世へと移り変わっていくのである。

〔註〕

(1) 「第一章　原始・古代の一志町」『一志町史　上巻』一志町教育委員会　1981

(2) 註(1)および北田　宏『高畑古墳発掘調査報告』一志町教育委員会　1982

(3) 「Ⅱ．平成４年度発掘調査報告」『平成４年度　三重県埋蔵文化財センター年報４』三重県埋蔵文化財センター　1993

(4) 中川　明『平成９年度土地改良総合整備事業に伴う笹遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

(5) 小坂宜広「Ⅳ．一志郡一志町小山　鳥居本遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 ―第３分冊５―』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991
河北秀実ほか「鳥居本遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告 ―第３分冊10―』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1992

(6) 稲生進一・吉村利男『一志町小山　鳥居本遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会　1975

(7) 註(1)

(8) 註(1)および下村登良男『上井生３号墳発掘調査報告』一志町教育委員会　1971

(9) 註(2)

(10) 註(1)

(11) 註(1)および下村登良男『下名倉古墳群発掘調査報告』一志町教育委員会　1971

(12) 註(5)・(6)

(13) 註(1)

(14) 註(3)

(15) 註(1)

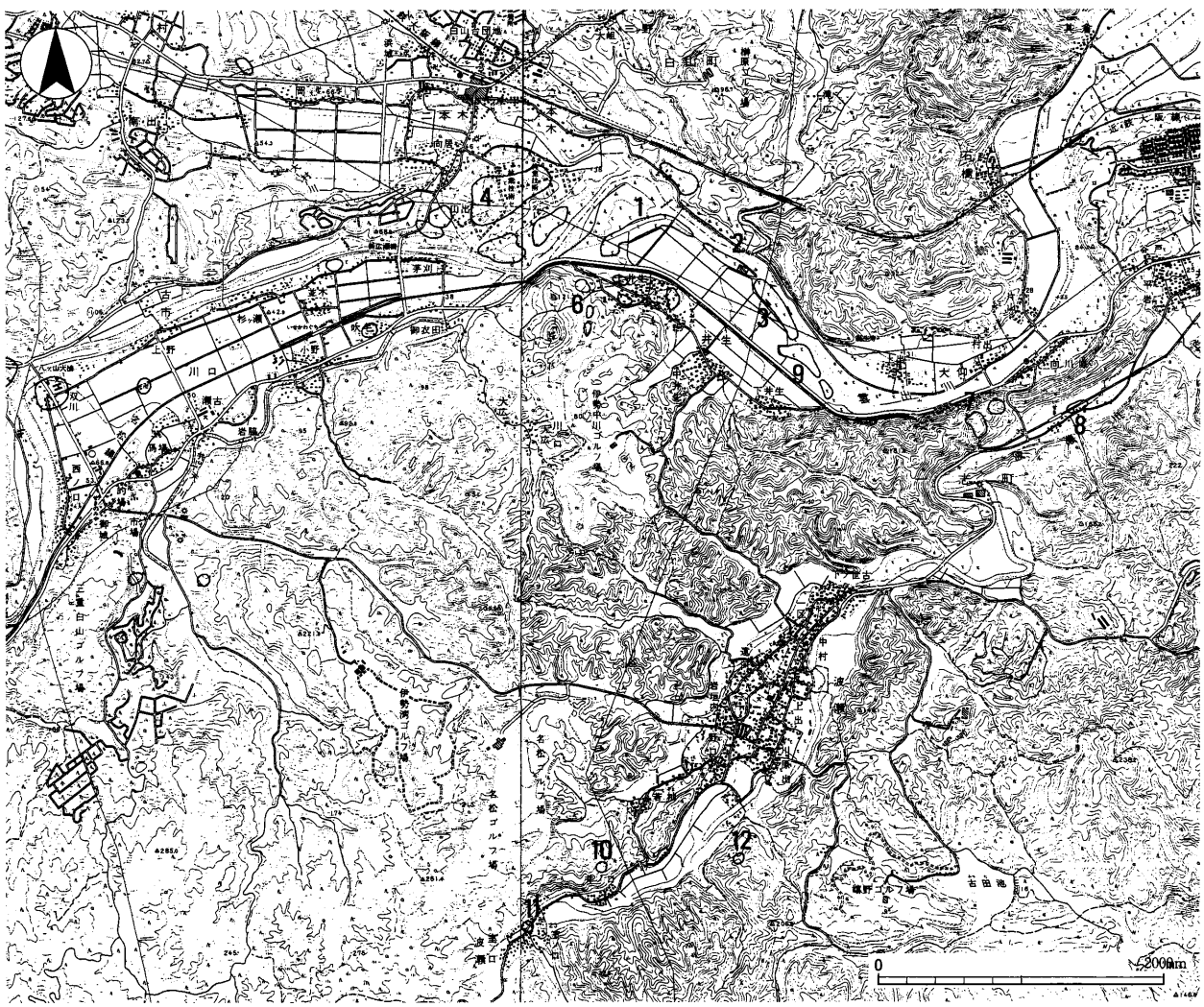
(16) 註(4)

(17) 註(3)

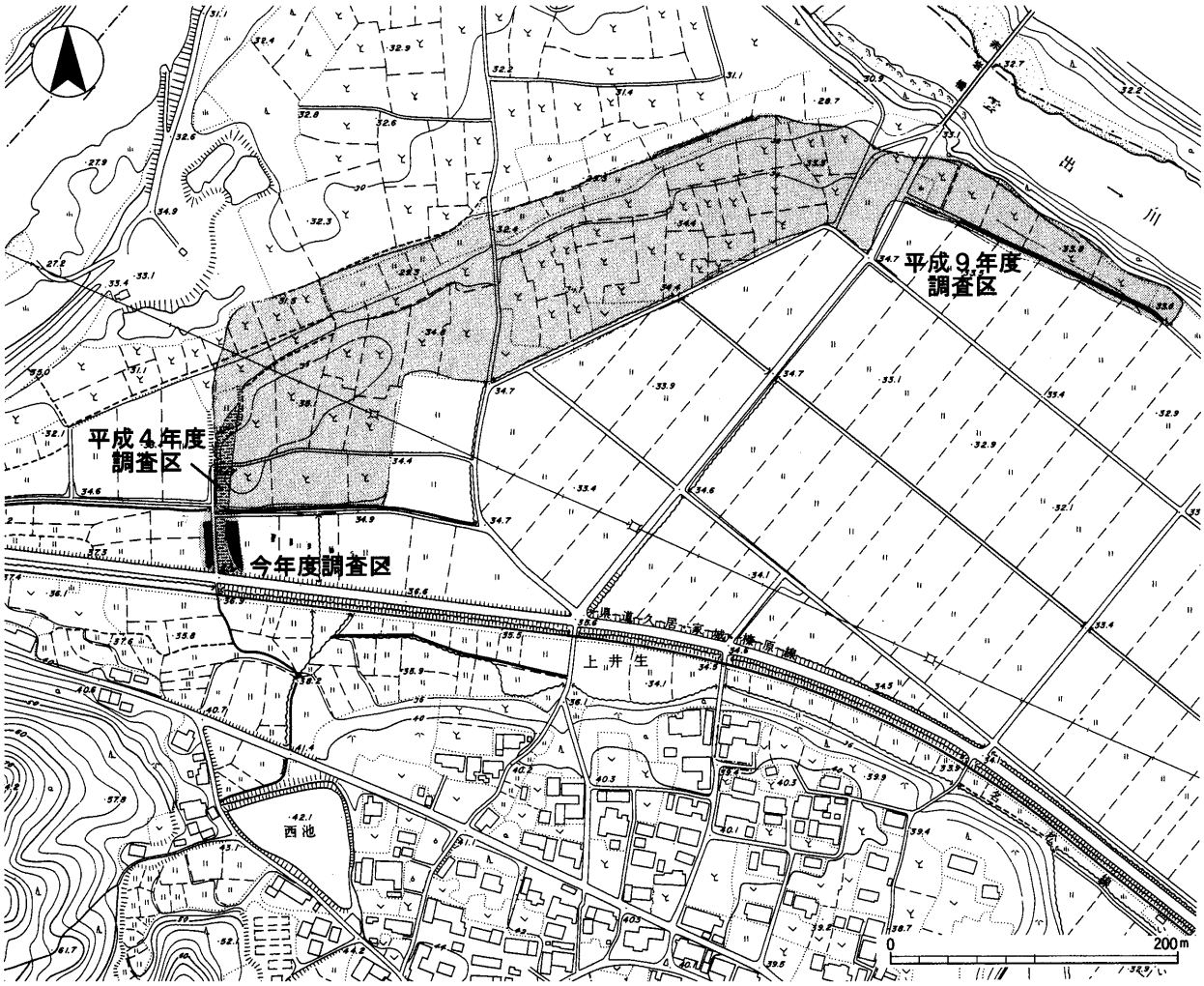
(18) 註(1)

(19) 註(1)

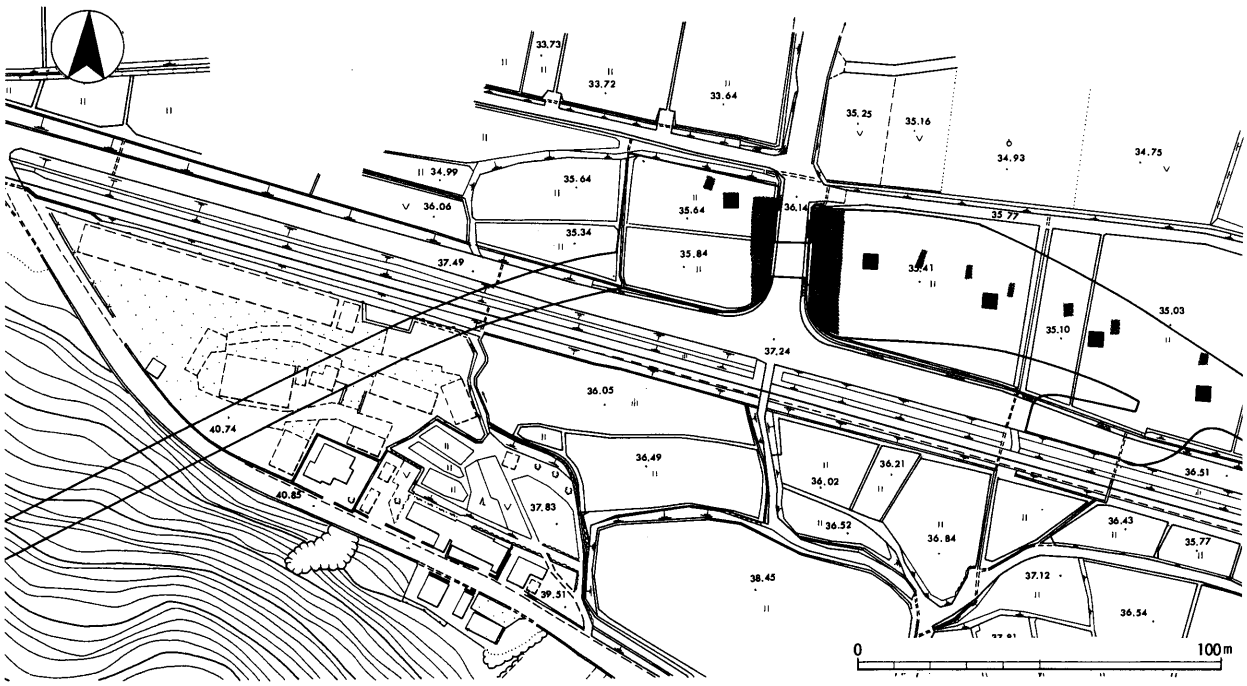
(20) 「第三章　中世の一志町」『一志町史　上巻』一志町教育委員会　1981
岡田　文雄「27．一志郡一志町　波瀬城」『三重の中世城館』三重県教育委員会　1976
岡田　文雄「27．一志郡一志町　波瀬館・出丸城」『三重の中世城館』三重県教育委員会　1976



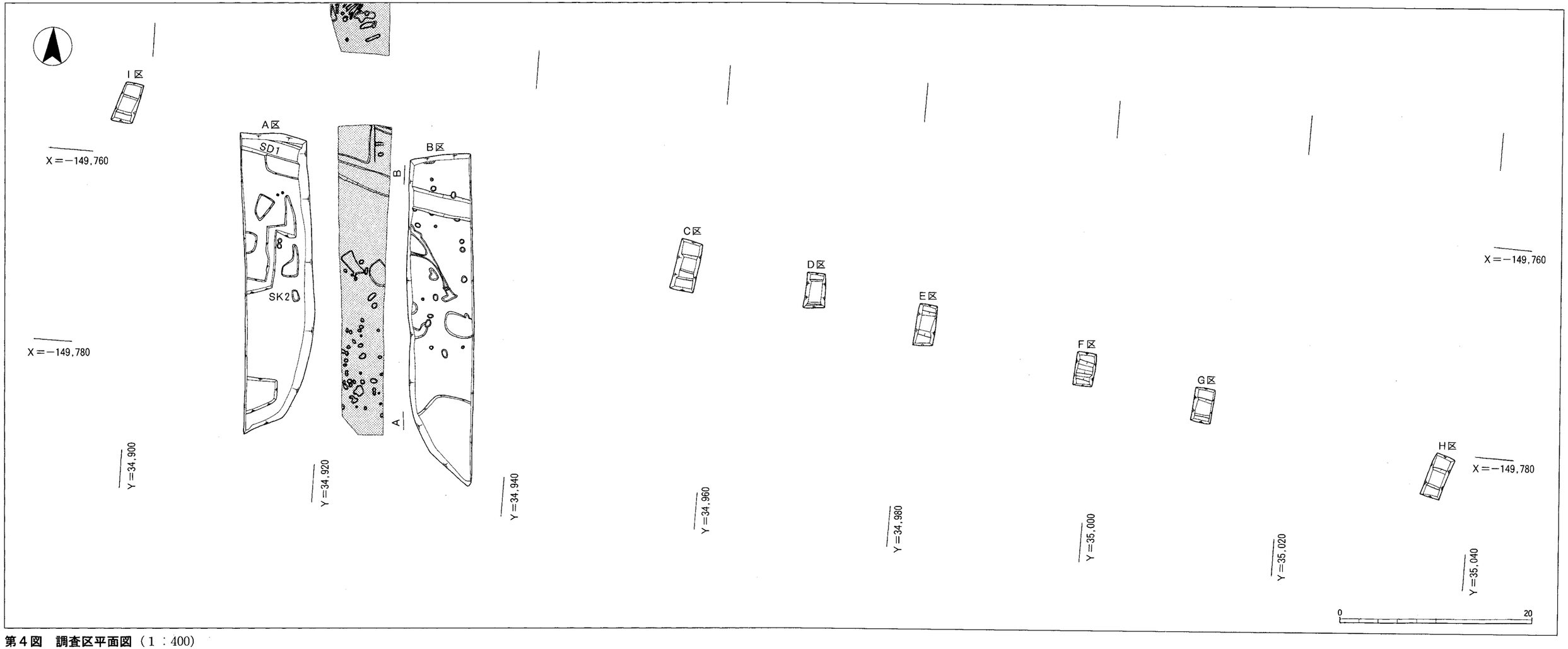
第１図　遺跡位置図（１：50,000）　［国土地理院「大仰」「二本木」１：25,000より］



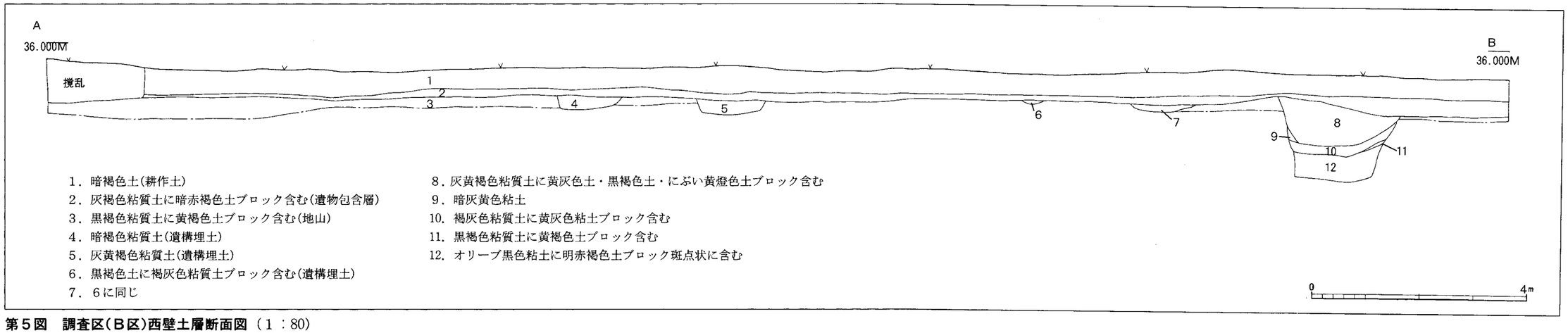
第2図　遺跡地形図（1：5,000）



第3図　調査区位置図（1：2,000）



第４図　調査区平面図（１：400）



1．暗褐色土(耕作土)
2．灰褐色粘質土に暗赤褐色土ブロック含む(遺物包含層)
3．黒褐色粘質土に黄褐色土ブロック含む(地山)
4．暗褐色粘質土(遺構埋土)
5．灰黄褐色粘質土(遺構埋土)
6．黒褐色土に褐灰色粘質土ブロック含む(遺構埋土)
7．６に同じ
8．灰黄褐色粘質土に黄灰色土・黒褐色土・にぶい黄燈色土ブロック含む
9．暗灰黄色粘土
10．褐灰色粘質土に黄灰色粘土ブロック含む
11．黒褐色粘質土に黄褐色土ブロック含む
12．オリーブ黒色粘土に明赤褐色土ブロック斑点状に含む

第５図　調査区(Ｂ区)西壁土層断面図（１：80）

Ⅲ　層位と遺構

(1)　層位

当遺跡の基本的な層位は、第１層：耕作土、第２層：灰褐色粘質土（遺物包含層）第３層：黒褐色粘質土（地山）の順であり、遺構検出は第３層上面で行った。遺構検出面までの深さは、0.5～0.6ｍであった。

(2)　遺構

Ａ・Ｂ両調査区とも南側は県道拡幅時の撹乱が広がっており特にＡ区では北側の撹乱も激しかった。遺物も非常に少なく時期を明確に決定できるような遺物が出土した遺構はなかった。このうち時期ははっきりしないが、今回の調査では唯一の明確な遺構といえるＡ・Ｂ両調査区で検出された溝ＳＤ１について詳細を述べる。

ＳＤ１

Ａ・Ｂ両調査区の北端で検出された東西溝である。最大幅は2.2ｍ、断面箱型で検出面からの深さは最大で1.5ｍ、溝底の高さはほぼ一定であった。埋土は灰黄褐色粘質土、褐灰色粘質土、オリーブ黒色粘土の大きく３層に分かれ、上の２層には黄褐色系の粘質土ブロックが混入しており、第３層には若干鉄分斑が見られた。方向はＮ78°Ｗである。そして用地内での延長を確認するべくＢ区の東側に６ヶ所(Ｃ～Ｈ区）Ａ区の西側に１ヶ所（Ｉ区）の計７ヶ所のトレンチを設定した。その結果ＳＤ１は用地内では東西約145ｍにわたって続いていることが確認された。遺物は、近世陶磁器・土師器片が若干出土したが、いずれも検出面直下もしくは10～20cm前後からで遺構に伴うものかどうかは不明である。

Ⅳ　遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナにして約１箱弱と非常に少量であった。そのうちでもほとんどが細片で、実測可能な遺物は数点のみであった。時期のわかる遺物のうちでは江戸時代の陶磁器片が最も多く、縄文土器、中世土師器片等も若干みられる。以下、図示できた遺物について概略を述べる。

１　縄文時代の遺物（１）

１は縄文土器深鉢の口縁部近くの体部片である。外面は頸部の屈曲部に隆帯状のものが見られ、その上にキザミ帯を有する。その下は若干縄文が残る貝殻条痕、内面は荒いミガキによる調整が施されている。縄文時代後期後半に位置づけられよう。

２　江戸時代の遺物（２～５）

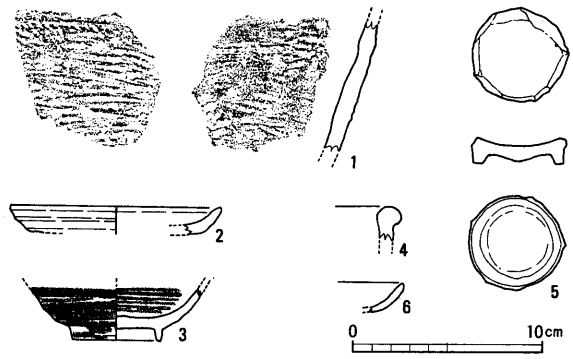
２は陶器丸皿である。体部は直線的に短く立ち上がる。内外面ともに灰釉が施される。３は陶器椀である。やや丸みを帯びた体部下方に断面二等辺三角形の高台がつく。内外面ともに白泥による刷目が施され、透明釉が施釉される。

４は陶器甕である。短く外に引き出される口縁部を持つ。内外面ともに灰釉が施される。

５は加工円盤である。天目茶椀の高台部分をそのまま利用したものである。外面は露胎、内面は鉄釉が施される。２～５はすべて瀬戸・美濃窯の製品で、時期は江戸時代中葉～後葉であろう。

３　時期不明の遺物（６）

６は土師器皿である。体部は直線的で口縁部はやや肥厚し、上方にそのまま立ち上がる。



第６図　出土遺物実測図

V 結　　語

前言でも述べた通り、笹遺跡としてはこれまでに２度調査が行われている。平成４年度の調査では今回の調査区から雲出川に向かって100mほど南を帯状に調査している。その結果、弥生・奈良・鎌倉・室町時代の遺構・遺物が確認されているが、今回の調査区の付近は遺構が明確でなかったと指摘されている。また、平成９年度の調査は今回の調査区から北東に約500～600mの場所に位置し、弥生・鎌倉・室町時代の遺構・遺物が確認されている。このことから考えて今回の調査区は雲出川から広がる笹遺跡の南端にあたり、当時の集落の縁辺部であったと考えられる。

それでは、今回の調査において唯一の明確な遺構といえるＳＤ１について若干の考察を行いたい。一志町史によると、大正14年、川口村と大井村井生普通水利組合がとりかわした「井溝敷地米更改契約證」に「万治、延享、文政、天保年間に於テ井生村ヨリ川口村ニ差シ入レタル旧記ハ永遠ニ確守スルモノトス」という記述がある。これは井生井堰と呼ばれ、万治年代（1658～1660）には雲出川に堰を設けてその水を導く水路ができていたと指摘している。元来、井生は雲出川に接しているが、耕地が高いので水利の便は極めて悪く、こうした灌漑事業なくしては水稲耕作がままならなかったという土地柄であったらしい。ＳＤ１はこの水路であった可能性が考えられるのである。上記の史料によれば、この水路は川口の方まで続いていることになるが、調査で確認された方向で延長していくと東は約1.1kmで雲出川に突き当たり、西は大村川の方角に延びる。恐らく東には調査で確認された方向で続き、西には今回の調査区外で川口の方に向かって折れていくのではないかと考えられる。ＳＤ１は検出状況からは改修された様子はなく、若干出土した近世陶磁器の年代も万治年間を含む時期とすることに無理はない。ＳＤ１は井生井堰の最初の形を伝えているのではないだろうか。

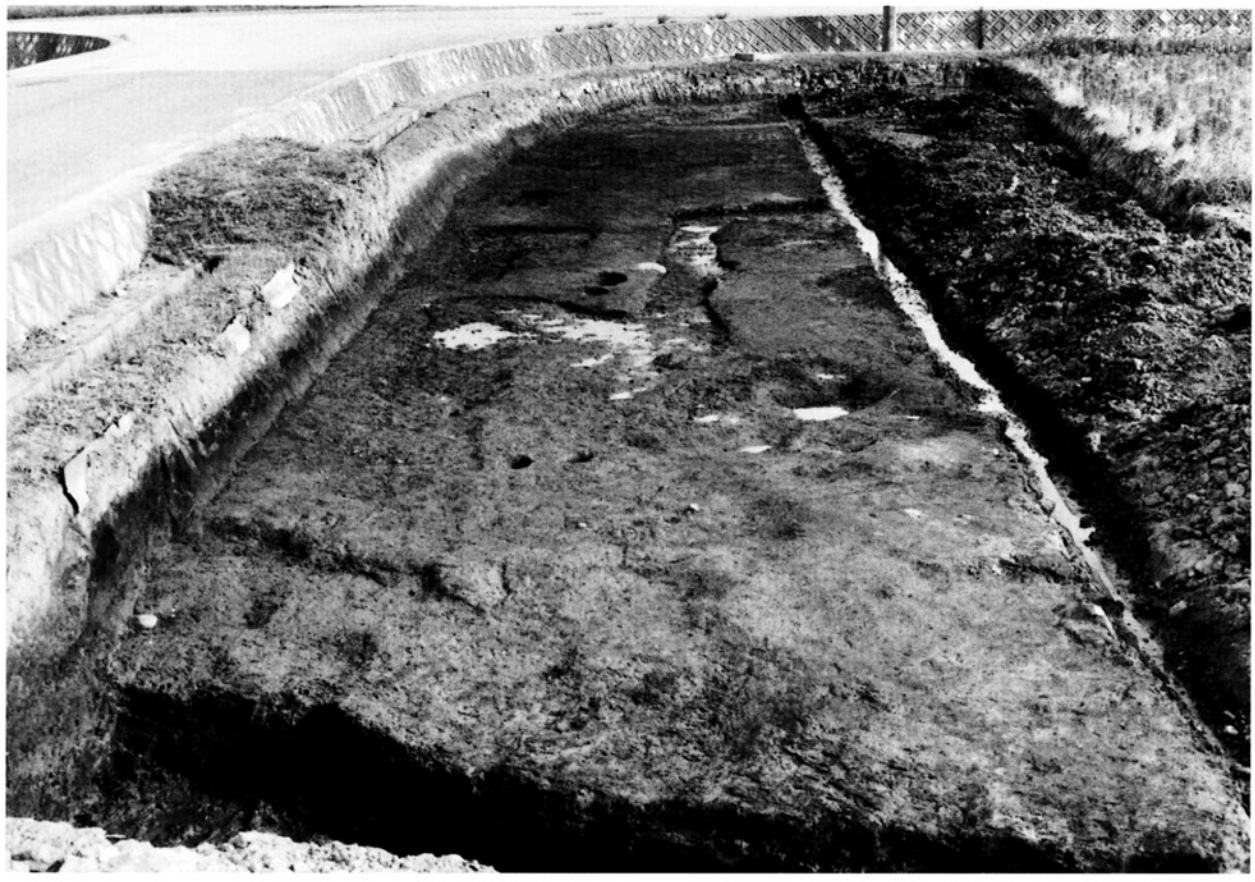
［註］

(1) 一志町教育委員会　伊勢野　久好氏の御教授による。

(2) 「第四章　近世の一志町」『一志町史　上巻』一志町教育委員会　1981

番号	器種		計測値			調整・釉薬等の特徴		色調・釉薬	口縁部残存率	出土位置	登録番号
			口径	底径	器高	内	外				
1	縄文土器	深鉢				ミガキ	貝殻条痕、縄文	暗灰黄色		包含層	001-06
2	陶器	皿	11.0			ロクロナデ	ロクロナデ	長石釉	1/12	撹乱	001-02
3	陶器	椀		5.0		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼付け後ナデ	透明釉		包含層	001-03
4	陶器	甕				ナデ	ナデ	灰釉	0/12	包含層	001-04
5	陶器	加工円盤	(径)2.5			ロクロナデ	ロクロケズリ	鉄釉		表土	001-01
6	土師器	皿				ナデ	ナデ	灰白色	0/12	ＳＫ２	001-05

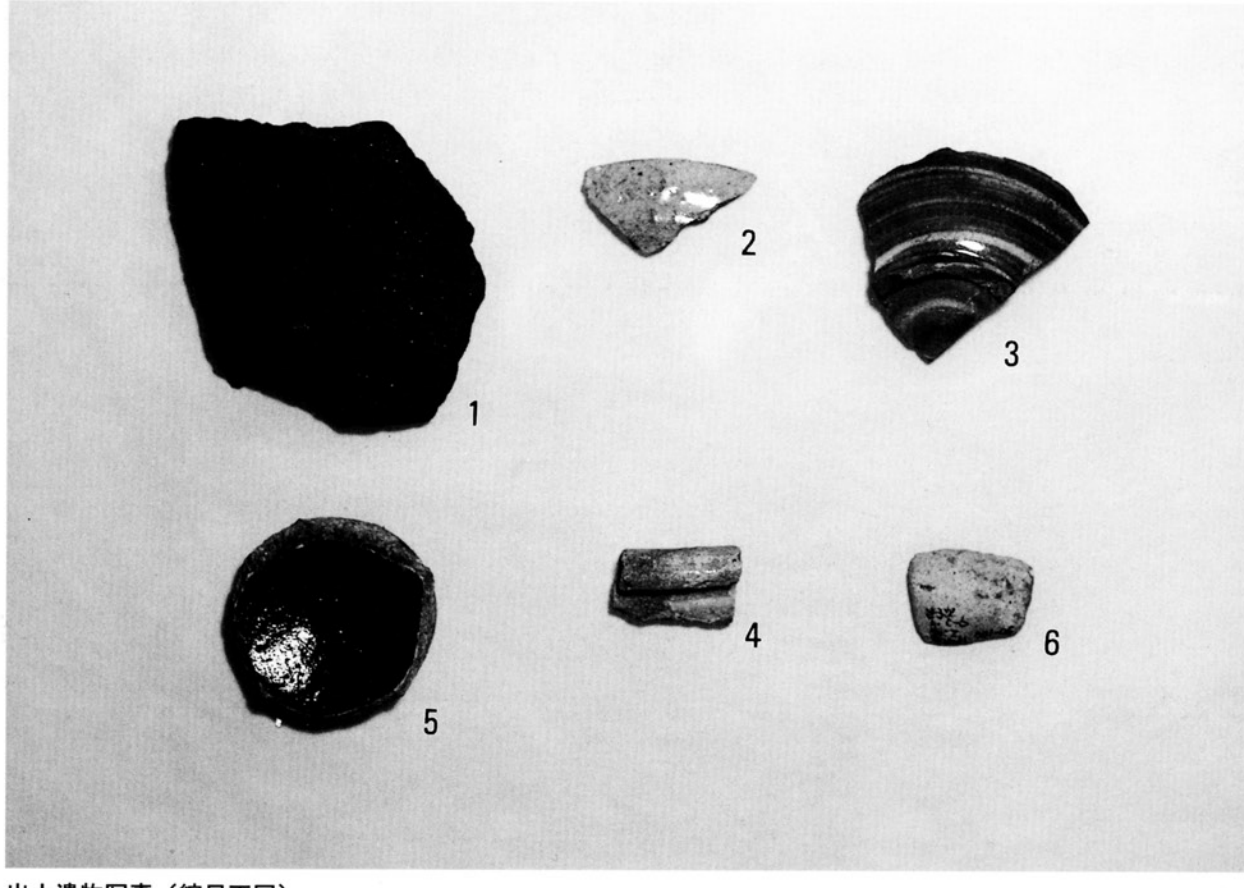
第１表　出土遺物観察表



A区　調査区全景　北から

B区　調査区全景　北から

作業風景



出土遺物写真（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	ささいせきだいさんじはっくつちょうさほうこく
書名	笹遺跡（第三次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	198
編著者名	金子智子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	1999年11月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
笹遺跡（ささいせき）	一志郡（いちしぐん） 一志町（いちしちょう） 字井生（あざゆう）	403	20			1999.5.17 ～ 1999.7.6	500	主要地方道久居美杉線井生BP緊急地方道路整備（B改良）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹遺跡	集落	縄文時代 鎌倉・室町時代 江戸時代	溝 土坑	縄文土器片 近世陶磁器 時期不明土師器片	

平成11(1999)年11月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　198

笹遺跡(第3次)発掘調査報告

1999・11

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社